

代数学 I 期末テスト予告問題 + 解答例

担当：大矢 浩徳 (OYA Hironori)*

- 代数学 I の成績は中間試験 40 %、期末試験 60 % の配分で付けられる。出席等は考慮されない。
- 問題 1-3 のうち 1 問、問題 4-5 のうち 1 問が出題される。
- 予告問題の配点は 100 点満点のうち 60 点の予定である。

問題 1

5 次対称群を \mathfrak{S}_5 と書く。

- (1) $X := \{1, 2, 3, 4, 5\}$ としたとき、

$$\mathfrak{S}_5 \times X \rightarrow X, (\sigma, i) \mapsto \sigma.i := \sigma(i)$$

は X 上の \mathfrak{S}_5 の作用を定める。このとき、 \mathfrak{S}_5 の $1 \in X$ における固定部分群 $(\mathfrak{S}_5)_1$ の位数、および商集合 $\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_1$ の元の個数を求めよ。ただし、計算の過程も説明すること。

- (2) $\tilde{X} := \{\{i, j\} \mid i, j \in X, i \neq j\}$ としたとき、

$$\mathfrak{S}_5 \times \tilde{X} \rightarrow \tilde{X}, (\sigma, \{i, j\}) \mapsto \sigma.\{i, j\} := \{\sigma(i), \sigma(j)\}$$

は \tilde{X} 上の \mathfrak{S}_5 の作用を定める。(ここで、 $\{i, j\}$ は i, j の 2 元からなる集合の意味であり、特に $\{i, j\} = \{j, i\}$ であることに注意する。) このとき、 \mathfrak{S}_5 の $\{2, 4\} \in \tilde{X}$ における固定部分群 $(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}$ の位数、および商集合 $\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}$ の元の個数を求めよ。ただし、計算の過程も説明すること。

- (3) X の相異なる 2 元 i, j に対し、

$$f_{ij}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) := \varepsilon_{ij}(x_i - x_j).$$

ただし、 $\varepsilon_{ij} = \begin{cases} 1 & i < j \text{ のとき} \\ -1 & i > j \text{ のとき} \end{cases}$ とする。(例えば $f_{25}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = \varepsilon_{25}(x_2 - x_5) = x_2 - x_5 = \varepsilon_{52}(x_5 - x_2) = f_{52}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5)$.) このとき、 $f_{ij}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = f_{ji}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5)$ となるので、各 $\{i, j\} \in \tilde{X}$ に対し、

$$f_{\{i,j\}}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) := f_{ij}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = f_{ji}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5)$$

とおく。いま、 x_1, x_2, x_3, x_4, x_5 の 5 変数多項式

$$\begin{aligned} f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) &= \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{i,j\}}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) \\ &= (x_1 - x_2)(x_1 - x_3)(x_1 - x_4)(x_1 - x_5)(x_2 - x_3)(x_2 - x_4)(x_2 - x_5)(x_3 - x_4)(x_3 - x_5)(x_4 - x_5) \end{aligned}$$

を考える。このとき、任意の $\sigma \in \mathfrak{S}_5$ に対し、 $\varepsilon(\sigma) \in \{1, -1\}$ が存在して、

$$f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) = \varepsilon(\sigma)f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5)$$

となることを示せ。

- (4) (3) で得られる対応 $\varepsilon: \mathfrak{S}_5 \rightarrow \{1, -1\}, \sigma \mapsto \varepsilon(\sigma)$ は群準同型となることを証明せよ。また、その核 $\text{Ker } \varepsilon$ の位数を求めよ。ただし、計算の過程も説明すること。

* Department of Mathematical Sciences, Shibaura Institute of Technology, 307 Fukasaku, Minuma-ku, Saitama-shi, Saitama, 337-8570, JAPAN e-mail: hoya@shibaura-it.ac.jp

問題 1 解答例.

(1)

$$\begin{aligned} (\mathfrak{S}_5)_1 &= \{\sigma \in \mathfrak{S}_5 \mid \sigma(1) = 1\} \\ &= \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 1 & i_1 & i_2 & i_3 & i_4 \end{pmatrix} \in \mathfrak{S}_5 \mid \{i_1, i_2, i_3, i_4\} = \{2, 3, 4, 5\} \right\}. \end{aligned}$$

よって、 $(\mathfrak{S}_5)_1$ の位数は 2, 3, 4, 5 の 4 文字を 1 列に並べる場合の数と等しく、 $4! = 24$ である。さらに $|\mathfrak{S}_5| = |\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_1| \cdot |(\mathfrak{S}_5)_1|$ より、

$$|\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_1| = \frac{|\mathfrak{S}_5|}{|(\mathfrak{S}_5)_1|} = \frac{5!}{4!} = 5. \quad \square$$

((1) 後半別解) $\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_1$ の元の個数は $1 \in X$ を含む軌道 $\mathfrak{S}_5 \cdot 1$ の元の個数に等しいが、任意の $i \in X$ に対して、 $\sigma(1) = i$ となる $\sigma \in \mathfrak{S}_5$ が取れるので、 $\mathfrak{S}_5 \cdot 1 = X$. よって、求める元の個数は 5. \square

(2)

$$\begin{aligned} (\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}} &= \{\sigma \in \mathfrak{S}_5 \mid \{\sigma(2), \sigma(4)\} = \{2, 4\}\} \\ &= \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ j_1 & i_1 & j_2 & i_2 & j_3 \end{pmatrix} \in \mathfrak{S}_5 \mid \{i_1, i_2\} = \{2, 4\}, \{j_1, j_2, j_3\} = \{1, 3, 5\} \right\}. \end{aligned}$$

よって、 $(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}$ の位数は 2, 4 の 2 文字を 1 列に並べる場合の数と 1, 3, 5 の 3 文字を 1 列に並べる場合の数の積に等しく、 $2! \times 3! = 12$. さらに $|\mathfrak{S}_5| = |\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}| \cdot |(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}|$ より、

$$|\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}| = \frac{|\mathfrak{S}_5|}{|(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}|} = \frac{5!}{12} = 10. \quad \square$$

((2) 後半別解) $\mathfrak{S}_5/(\mathfrak{S}_5)_{\{2,4\}}$ の元の個数は $\{2, 4\} \in \tilde{X}$ を含む軌道 $\mathfrak{S}_5 \cdot \{2, 4\}$ の元の個数に等しいが、任意の $\{i, j\} \in \tilde{X}$ に対して、 $\sigma(2) = i$ かつ $\sigma(4) = j$ となる $\sigma \in \mathfrak{S}_5$ を取ると、 $\sigma \cdot \{2, 4\} = \{i, j\}$ となるので、 $\mathfrak{S}_5 \cdot \{2, 4\} = \tilde{X}$. よって、求める元の個数は ${}_5C_2 = \frac{5 \times 4}{2 \times 1} = 10$. \square

(3) 各 $\{i, j\} \in \tilde{X}$ に対し、

$$\begin{aligned} f_{\{i,j\}}(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) &= \varepsilon_{ij}(x_{\sigma(i)} - x_{\sigma(j)}) \\ &= \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} \varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}(x_{\sigma(i)} - x_{\sigma(j)}) \\ &= \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} f_{\{\sigma(i), \sigma(j)\}}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5). \end{aligned}$$

これより、

$$\begin{aligned} f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) &= \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{i,j\}}(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) \\ &= \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{\sigma(i), \sigma(j)\}}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) \end{aligned}$$

一方各 $\sigma \in \mathfrak{S}_5$ に対し、(2) の作用で定まる対応 $\tilde{X} \rightarrow \tilde{X}, \{i, j\} \mapsto \sigma \cdot \{i, j\} = \{\sigma(i), \sigma(j)\}$ は 1 対 1 なので、 $\tilde{X} = \{\{\sigma(i), \sigma(j)\} \mid \{i, j\} \in \tilde{X}\}$. よって、

$$f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{i,j\}}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{\sigma(i), \sigma(j)\}}(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5).$$

以上より、

$$f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) = \left(\prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} \right) f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5).$$

いま $\prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}}$ は 1 または -1 なので、示すべきことは示された。 \square

(4) 任意の 2 元 $\sigma, \tau \in \mathfrak{S}_5$ をとる。このとき、

$$g(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) := f(x_{\tau(1)}, x_{\tau(2)}, x_{\tau(3)}, x_{\tau(4)}, x_{\tau(5)}) = \varepsilon(\tau) f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5)$$

とすると、 $g(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) = f(x_{\sigma\tau(1)}, x_{\sigma\tau(2)}, x_{\sigma\tau(3)}, x_{\sigma\tau(4)}, x_{\sigma\tau(5)})$ 。よって、

$$\begin{aligned} \varepsilon(\sigma\tau) f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) &= f(x_{\sigma\tau(1)}, x_{\sigma\tau(2)}, x_{\sigma\tau(3)}, x_{\sigma\tau(4)}, x_{\sigma\tau(5)}) \\ &= g(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) \\ &= \varepsilon(\tau) f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}, x_{\sigma(5)}) \\ &= \varepsilon(\sigma)\varepsilon(\tau) f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5). \end{aligned}$$

となるので、 $\varepsilon(\sigma\tau) = \varepsilon(\sigma)\varepsilon(\tau)$ 。よって、 ε は群準同型である。また、

$$\begin{aligned} f(x_2, x_1, x_3, x_4, x_5) &= (x_2 - x_1)(x_2 - x_3)(x_2 - x_4)(x_2 - x_5)(x_1 - x_3)(x_1 - x_4)(x_1 - x_5)(x_3 - x_4)(x_3 - x_5)(x_4 - x_5) \\ &= -f(x_1, x_2, x_3, x_4, x_5) \end{aligned}$$

より、 $\varepsilon((1\ 2)) = -1$ 。よって、 $\varepsilon(e) = 1$ と合わせると、 ε は全射群準同型。これより準同型定理から、

$$\mathfrak{S}_5 / \text{Ker } \varepsilon \simeq \{1, -1\}$$

となるので、 $|\mathfrak{S}_5 / \text{Ker } \varepsilon| = 2$ 。 $|\mathfrak{S}_5| = |\mathfrak{S}_5 / \text{Ker } \varepsilon| \cdot |\text{Ker } \varepsilon|$ と合わせると、

$$|\text{Ker } \varepsilon| = \frac{|\mathfrak{S}_5|}{|\mathfrak{S}_5 / \text{Ker } \varepsilon|} = \frac{5!}{2} = 60.$$

((4) : ε が準同型写像であることの別解) (3) より各 $\sigma \in \mathfrak{S}_5$ に対し、 $\varepsilon(\sigma) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}}$ であるので、任

意の 2 元 $\sigma, \tau \in \mathfrak{S}_5$ に対し、

$$\varepsilon(\sigma\tau) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma\tau(i)\sigma\tau(j)}} = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{\tau(i)\tau(j)}}{\varepsilon_{\sigma\tau(i)\sigma\tau(j)}} \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\tau(i)\tau(j)}} = \varepsilon(\sigma)\varepsilon(\tau).$$

ここで、最後の等式においては $\tilde{X} = \{\{\tau(i), \tau(j)\} \mid \{i, j\} \in \tilde{X}\}$ を用いた。よって、 ε は群準同型である。 \square

問題 2

4 次対称群を \mathfrak{S}_4 と書く.

- (1) $\tilde{X} := \{\{i, j\} \mid i, j \text{ は } 1 \text{ 以上 } 4 \text{ 以下の相異なる整数}\}$ としたとき、

$$\mathfrak{S}_4 \times \tilde{X} \rightarrow \tilde{X}, (\sigma, \{i, j\}) \mapsto \sigma.\{i, j\} := \{\sigma(i), \sigma(j)\}$$

は \tilde{X} 上の \mathfrak{S}_4 の作用を定める. (ここで、 $\{i, j\}$ は i, j の 2 元からなる集合の意味であり、特に $\{i, j\} = \{j, i\}$ であることに注意する.) このとき、 \mathfrak{S}_4 の $\{1, 2\} \in \tilde{X}$ における固定部分群 $(\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}}$ の位数、および商集合 $\mathfrak{S}_4/(\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}}$ の元の個数を求めよ. ただし、計算の過程も説明すること.

- (2) $\{1, 2, 3, 4\}$ の相異なる 2 元 i, j に対し、

$$f_{ij}(x_1, x_2, x_3, x_4) := \varepsilon_{ij}(x_i - x_j).$$

ただし、 $\varepsilon_{ij} = \begin{cases} 1 & i < j \text{ のとき} \\ -1 & i > j \text{ のとき} \end{cases}$ とする. (例えば $f_{24}(x_1, x_2, x_3, x_4) = \varepsilon_{24}(x_2 - x_4) = x_2 - x_4 = \varepsilon_{42}(x_4 - x_2) = f_{42}(x_1, x_2, x_3, x_4)$.) このとき、 $f_{ij}(x_1, x_2, x_3, x_4) = f_{ji}(x_1, x_2, x_3, x_4)$ となるので、各 $\{i, j\} \in \tilde{X}$ に対し、

$$f_{\{i, j\}}(x_1, x_2, x_3, x_4) := f_{ij}(x_1, x_2, x_3, x_4) = f_{ji}(x_1, x_2, x_3, x_4)$$

とおく. いま、 x_1, x_2, x_3, x_4 の 4 変数多項式

$$\begin{aligned} f(x_1, x_2, x_3, x_4) &= \prod_{\{i, j\} \in \tilde{X}} f_{\{i, j\}}(x_1, x_2, x_3, x_4) \\ &= (x_1 - x_2)(x_1 - x_3)(x_1 - x_4)(x_2 - x_3)(x_2 - x_4)(x_3 - x_4) \end{aligned}$$

を考える. このとき、任意の $\sigma \in \mathfrak{S}_4$ に対し、 $\varepsilon(\sigma) \in \{1, -1\}$ が存在して、

$$f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) = \varepsilon(\sigma)f(x_1, x_2, x_3, x_4)$$

となることを示せ.

- (3) (2) で得られる対応 $\varepsilon: \mathfrak{S}_4 \rightarrow \{1, -1\}, \sigma \mapsto \varepsilon(\sigma)$ は群準同型となることを証明せよ. また、その核 $\text{Ker } \varepsilon$ の位数を求めよ. ただし、計算の過程も説明すること.
- (4) (3) の $\text{Ker } \varepsilon$ は $\{(i \ i+1)(j \ j+1) \mid i, j \in \{1, 2, 3\}\}$ で生成されることを証明せよ.

問題 2 解答例.

(1)

$$\begin{aligned} (\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}} &= \{\sigma \in \mathfrak{S}_4 \mid \{\sigma(1), \sigma(2)\} = \{1, 2\}\} \\ &= \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ i_1 & i_2 & j_1 & j_2 \end{pmatrix} \in \mathfrak{S}_4 \mid \{i_1, i_2\} = \{1, 2\}, \{j_1, j_2\} = \{3, 4\} \right\}. \end{aligned}$$

よって、 $(\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}}$ の位数は 1, 2 の 2 文字を 1 列に並べる場合の数と 3, 4 の 2 文字を 1 列に並べる場合の数の積に等しく、 $2! \times 2! = 4$. さらに $|\mathfrak{S}_4| = |\mathfrak{S}_4/(\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}}| \cdot |(\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}}|$ より、

$$|\mathfrak{S}_4/(\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}}| = \frac{|\mathfrak{S}_4|}{|(\mathfrak{S}_4)_{\{1, 2\}}|} = \frac{4!}{4} = 6.$$

□

(1) 後半別解) $\mathfrak{S}_4/(\mathfrak{S}_4)_{\{1,2\}}$ の元の個数は $\{1,2\} \in \tilde{X}$ を含む軌道 $\mathfrak{S}_4 \cdot \{1,2\}$ の元の個数に等しいが、任意の $\{i,j\} \in \tilde{X}$ に対して、 $\sigma(1) = i$ かつ $\sigma(2) = j$ となる $\sigma \in \mathfrak{S}_4$ を取ると、 $\sigma \cdot \{1,2\} = \{i,j\}$ となるので、 $\mathfrak{S}_4 \cdot \{1,2\} = \tilde{X}$. よって、求める元の個数は ${}_4C_2 = \frac{4 \times 3}{2 \times 1} = 6$. \square

(2) 各 $\{i,j\} \in \tilde{X}$ に対し、

$$\begin{aligned} f_{\{i,j\}}(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) &= \varepsilon_{ij}(x_{\sigma(i)} - x_{\sigma(j)}) \\ &= \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} \varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}(x_{\sigma(i)} - x_{\sigma(j)}) \\ &= \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} f_{\{\sigma(i),\sigma(j)\}}(x_1, x_2, x_3, x_4). \end{aligned}$$

これより、

$$\begin{aligned} f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) &= \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{i,j\}}(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) \\ &= \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{\sigma(i),\sigma(j)\}}(x_1, x_2, x_3, x_4) \end{aligned}$$

一方各 $\sigma \in \mathfrak{S}_5$ に対し、(1) の作用で定まる対応 $\tilde{X} \rightarrow \tilde{X}, \{i,j\} \mapsto \sigma \cdot \{i,j\} = \{\sigma(i), \sigma(j)\}$ は 1 対 1 なので、 $\tilde{X} = \{\{\sigma(i), \sigma(j)\} \mid \{i,j\} \in \tilde{X}\}$. よって、

$$f(x_1, x_2, x_3, x_4) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{i,j\}}(x_1, x_2, x_3, x_4) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} f_{\{\sigma(i),\sigma(j)\}}(x_1, x_2, x_3, x_4).$$

以上より、

$$f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) = \left(\prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}} \right) f(x_1, x_2, x_3, x_4).$$

いま $\prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}}$ は 1 または -1 なので、示すべきことは示された. \square

(3) 任意の 2 元 $\sigma, \tau \in \mathfrak{S}_4$ をとる. このとき、

$$g(x_1, x_2, x_3, x_4) := f(x_{\tau(1)}, x_{\tau(2)}, x_{\tau(3)}, x_{\tau(4)}) = \varepsilon(\tau) f(x_1, x_2, x_3, x_4)$$

とすると、 $g(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) = f(x_{\sigma\tau(1)}, x_{\sigma\tau(2)}, x_{\sigma\tau(3)}, x_{\sigma\tau(4)})$. よって、

$$\begin{aligned} \varepsilon(\sigma\tau) f(x_1, x_2, x_3, x_4) &= f(x_{\sigma\tau(1)}, x_{\sigma\tau(2)}, x_{\sigma\tau(3)}, x_{\sigma\tau(4)}) \\ &= g(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) \\ &= \varepsilon(\tau) f(x_{\sigma(1)}, x_{\sigma(2)}, x_{\sigma(3)}, x_{\sigma(4)}) \\ &= \varepsilon(\sigma) \varepsilon(\tau) f(x_1, x_2, x_3, x_4). \end{aligned}$$

となるので、 $\varepsilon(\sigma\tau) = \varepsilon(\sigma)\varepsilon(\tau)$. よって、 ε は群準同型である. また、

$$f(x_2, x_1, x_3, x_4) = (x_2 - x_1)(x_2 - x_3)(x_2 - x_4)(x_1 - x_3)(x_1 - x_4)(x_3 - x_4) = -f(x_1, x_2, x_3, x_4)$$

より、 $\varepsilon((1\ 2)) = -1$. よって、 $\varepsilon(e) = 1$ と合わせると、 ε は全射群準同型. これより準同型定理から、

$$\mathfrak{S}_4 / \text{Ker } \varepsilon \simeq \{1, -1\}$$

となるので、 $|\mathfrak{S}_4 / \text{Ker } \varepsilon| = 2$. $|\mathfrak{S}_4| = |\mathfrak{S}_4 / \text{Ker } \varepsilon| \cdot |\text{Ker } \varepsilon|$ と合わせると、

$$|\text{Ker } \varepsilon| = \frac{|\mathfrak{S}_4|}{|\mathfrak{S}_4 / \text{Ker } \varepsilon|} = \frac{4!}{2} = 12.$$

\square

((3) : ε が準同型写像であることの別解) (2) より各 $\sigma \in \mathfrak{S}_4$ に対し、 $\varepsilon(\sigma) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma(i)\sigma(j)}}$ であるので、任意の 2 元 $\sigma, \tau \in \mathfrak{S}_4$ に対し、

$$\varepsilon(\sigma\tau) = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\sigma\tau(i)\sigma\tau(j)}} = \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{\tau(i)\tau(j)}}{\varepsilon_{\sigma\tau(i)\sigma\tau(j)}} \prod_{\{i,j\} \in \tilde{X}} \frac{\varepsilon_{ij}}{\varepsilon_{\tau(i)\tau(j)}} = \varepsilon(\sigma)\varepsilon(\tau).$$

ここで、最後の等式においては $\tilde{X} = \{\{\tau(i), \tau(j)\} \mid \{i, j\} \in \tilde{X}\}$ を用いた。よって、 ε は群準同型である。 □
(4)

$$\begin{aligned} f(x_1, x_3, x_2, x_4) &= (x_1 - x_3)(x_1 - x_2)(x_1 - x_4)(x_3 - x_2)(x_3 - x_4)(x_2 - x_4) = -f(x_1, x_2, x_3, x_4) \\ f(x_1, x_2, x_4, x_3) &= (x_1 - x_2)(x_1 - x_4)(x_1 - x_3)(x_2 - x_4)(x_2 - x_3)(x_4 - x_3) = -f(x_1, x_2, x_3, x_4) \end{aligned}$$

と (3) の計算より、 $\varepsilon((1\ 2)) = \varepsilon((2\ 3)) = \varepsilon((3\ 4)) = -1$ 。よって、(3) より ε は群準同型であることから、任意の $i, j \in \{1, 2, 3\}$ に対し、

$$\varepsilon((i\ i+1)(j\ j+1)) = \varepsilon((i\ i+1))\varepsilon((j\ j+1)) = (-1) \times (-1) = 1.$$

よって、 $\{(i\ i+1)(j\ j+1) \mid i, j \in \{1, 2, 3\}\} \subset \text{Ker } \varepsilon$ なので、 $\langle \{(i\ i+1)(j\ j+1) \mid i, j \in \{1, 2, 3\}\} \rangle \subset \text{Ker } \varepsilon$ 。
逆に、任意の $\sigma \in \text{Ker } \varepsilon$ を隣接互換 $(i\ i+1)$, $i \in \{1, 2, 3\}$ の積で

$$\sigma = (i_1\ i_1+1) \cdots (i_k\ i_k+1)$$

と書いたとすると、

$$1 = \varepsilon(\sigma) = \varepsilon((i_1\ i_1+1)) \cdots \varepsilon((i_k\ i_k+1)) = (-1)^k$$

なので、 k は偶数。よって、 $\sigma \in \langle \{(i\ i+1)(j\ j+1) \mid i, j \in \{1, 2, 3\}\} \rangle$ 。以上より、 $\langle \{(i\ i+1)(j\ j+1) \mid i, j \in \{1, 2, 3\}\} \rangle = \text{Ker } \varepsilon$ 。 □

問題 3

n を 2 以上の整数とする。行列群

$$GL_2(\mathbb{R}) := \left\{ \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \mid a, b, c, d \in \mathbb{R}, ad - bc \neq 0 \right\}$$

の 2 元

$$\sigma := \begin{pmatrix} \cos \frac{2\pi}{n} & -\sin \frac{2\pi}{n} \\ \sin \frac{2\pi}{n} & \cos \frac{2\pi}{n} \end{pmatrix} \quad \tau := \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$

で生成される部分群 $\langle \{\sigma, \tau\} \rangle$ を D_n とおく。このとき、以下の問に答えよ。

- (1) 各 $k \in \mathbb{Z}$ に対し、 σ^k を具体的な行列の形で表示せよ (答えのみでよい)。
- (2) σ, τ の位数を求めよ。ただし、それぞれ計算の過程も説明すること。
- (3) D_n の全ての元を具体的な行列の形で表示し、 D_n の位数を述べよ (答えのみでよい)。
- (4)

$$D_n \times \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2, \left(\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) \mapsto \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax + by \\ cx + dy \end{pmatrix} \quad (\text{行列の積})$$

は \mathbb{R}^2 上の D_n の作用を定める。このとき、 D_n の $v := \begin{pmatrix} \cos \frac{\pi}{n} \\ \sin \frac{\pi}{n} \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$ における固定部分群 $(D_n)_v$

の位数、および商集合 $D_n / (D_n)_v$ の元の個数を求めよ。ただし、計算の過程も説明すること。

- (5) 群準同型 $\Delta: D_n \rightarrow \mathbb{R}^\times, g \mapsto \det g$ の核 $\text{Ker } \Delta$ を求めよ。ただし、計算の過程も説明すること。

問題 3 解答例.

$$(1) \sigma^k = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \quad \square$$

***** (1) の解法 (実際の試験では書く必要はない) *****

任意の $k \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に対し、

$$\sigma^k = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \quad (*)$$

となることを数学的帰納法で証明する. $k = 0$ のとき、 $\sigma^0 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos 0 & -\sin 0 \\ \sin 0 & \cos 0 \end{pmatrix}$ より、(*) は成立する. 次に、ある $k \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に関して (*) が成立すると仮定すると、

$$\begin{aligned} \sigma^{k+1} &= \sigma^k \sigma = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \frac{2\pi}{n} & -\sin \frac{2\pi}{n} \\ \sin \frac{2\pi}{n} & \cos \frac{2\pi}{n} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} \cos \frac{2\pi}{n} - \sin \frac{2k\pi}{n} \sin \frac{2\pi}{n} & -\cos \frac{2k\pi}{n} \sin \frac{2\pi}{n} - \sin \frac{2k\pi}{n} \cos \frac{2\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} \cos \frac{2\pi}{n} + \cos \frac{2k\pi}{n} \sin \frac{2\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \sin \frac{2\pi}{n} + \cos \frac{2k\pi}{n} \cos \frac{2\pi}{n} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} \cos \frac{2(k+1)\pi}{n} & -\sin \frac{2(k+1)\pi}{n} \\ \sin \frac{2(k+1)\pi}{n} & \cos \frac{2(k+1)\pi}{n} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

より、 k を $k+1$ としても (*) が成立する. 以上から任意の $k \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に対して、(*) が成立することがわかる.

さらに、 $k \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に対して、

$$\sigma^{-k} = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix}^{-1} = \frac{1}{\cos^2 \frac{2k\pi}{n} + \sin^2 \frac{2k\pi}{n}} \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & \sin \frac{2k\pi}{n} \\ -\sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \left(-\frac{2k\pi}{n}\right) & -\sin \left(-\frac{2k\pi}{n}\right) \\ \sin \left(-\frac{2k\pi}{n}\right) & \cos \left(-\frac{2k\pi}{n}\right) \end{pmatrix}$$

より、 k を $-k$ としても (*) は成立する. 以上より、任意の $k \in \mathbb{Z}$ に対し、

$$\sigma^k = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix}.$$

□

(2) (1) より、

$$\begin{aligned} \sigma^k = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} &\Leftrightarrow \cos \frac{2k\pi}{n} = 1, \sin \frac{2k\pi}{n} = 0 \\ &\Leftrightarrow k \in n\mathbb{Z} = \{mn \mid m \in \mathbb{Z}\}. \end{aligned}$$

なので、 $\text{ord } \sigma = n$. また、

$$\tau \neq \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \quad \tau^2 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}.$$

より、 $\text{ord } \tau = 2$. □

$$(3) D_n = \left\{ \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \mid k = 0, 1, \dots, n-1, \ell = 0, 1 \right\}, \quad |D_n| = 2n.$$

***** (3) の解法 (実際の試験では書く必要はない) *****

各 $k \in \mathbb{Z}$ に対し、

$$\begin{aligned} \tau \sigma^k &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ -\sin \frac{2k\pi}{n} & -\cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \\ \sigma^k \tau &= \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & -\cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \end{aligned}$$

より、 $\tau\sigma^k = \sigma^{-k}\tau$. この関係式を繰り返し用いると、 D_n の一般の元 $\sigma^{k_1}\tau^{\ell_1}\sigma^{k_2}\tau^{\ell_2}\dots\sigma^{k_s}\tau^{\ell_s}$, $k_1, \dots, k_s, \ell_1, \dots, \ell_s \in \mathbb{Z}$ は $\sigma^k\tau^\ell$, $k, \ell \in \mathbb{Z}$ の形に書き換えられる. これにさらに、 σ の位数が n 、 τ の位数が 2 であることを考慮すると、

$$\begin{aligned} D_n &= \{\sigma^k\tau^\ell \mid k = 0, 1, \dots, n-1, \ell = 0, 1\} \\ &= \left\{ \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \mid k = 0, 1, \dots, n-1, \ell = 0, 1 \right\} \end{aligned}$$

となり、その位数は $2n$ である. □

(4) (3) より、 D_n の一般の元は $\begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix}$, $k = 0, 1, \dots, n-1, \ell = 0, 1$ と書ける. ここで、

$$\begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \cdot v = \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} \cos \frac{\pi}{n} + (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \sin \frac{\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} \cos \frac{\pi}{n} + (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \sin \frac{\pi}{n} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \frac{(2k+(-1)^\ell)\pi}{n} \\ \sin \frac{(2k+(-1)^\ell)\pi}{n} \end{pmatrix}$$

これより、

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \cdot v = v &\Leftrightarrow \cos \frac{(2k+(-1)^\ell)\pi}{n} = \cos \frac{\pi}{n}, \sin \frac{(2k+(-1)^\ell)\pi}{n} = \sin \frac{\pi}{n} \\ &\Leftrightarrow 2k + (-1)^\ell \in 1 + 2n\mathbb{Z} = \{1 + 2mn \mid m \in \mathbb{Z}\}. \end{aligned}$$

$k = 0, 1, \dots, n-1, \ell = 0, 1$ の範囲で最後の条件を満たすものは、 $(k, \ell) = (0, 0), (1, 1)$ のみであるので、

$$(D_n)_v = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} \cos \frac{2\pi}{n} & \sin \frac{2\pi}{n} \\ \sin \frac{2\pi}{n} & -\cos \frac{2\pi}{n} \end{pmatrix} \right\}, |(D_n)_v| = 2.$$

さらに $|D_n| = |D_n/(D_n)_v| \cdot |(D_n)_v|$ より、

$$|D_n/(D_n)_v| = \frac{|D_n|}{|(D_n)_v|} = \frac{2n}{2} = n. \quad \square$$

(5) (3) より、 D_n の一般の元は $\begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix}$, $k = 0, 1, \dots, n-1, \ell = 0, 1$ と書ける. ここで、

$$\Delta \left(\begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \right) = (-1)^\ell \cos^2 \frac{2k\pi}{n} + (-1)^\ell \sin^2 \frac{2k\pi}{n} = (-1)^\ell.$$

よって、

$$\Delta \left(\begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & (-1)^{1+\ell} \sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & (-1)^\ell \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \right) = 1 \Leftrightarrow \ell = 0.$$

これより、

$$\text{Ker } \Delta = \left\{ \begin{pmatrix} \cos \frac{2k\pi}{n} & -\sin \frac{2k\pi}{n} \\ \sin \frac{2k\pi}{n} & \cos \frac{2k\pi}{n} \end{pmatrix} \mid k = 0, \dots, n-1 \right\}. \quad \square$$

問題 4

G を位数 18 の有限群とする.

(1) $\tilde{X} := \{\{g_1, g_2, g_3\} \subset G \mid g_1, g_2, g_3 \text{ は相異なる } G \text{ の } 3 \text{ 元}\}$ とする. このとき、 \tilde{X} の元の個数を求めよ (答えのみでよい).

(2)

$$G \times \tilde{X} \rightarrow \tilde{X}, (g, \{g_1, g_2, g_3\}) \mapsto \{gg_1, gg_2, gg_3\}$$

は \tilde{X} 上の G の作用を定める. この作用に関する $\{g_1, g_2, g_3\} \in \tilde{X}$ の元の固定部分群 $G_{\{g_1, g_2, g_3\}}$ の位数は 3 以下であることを証明せよ.

(3) (2) の \tilde{X} 上の G の作用は元の個数が 6 である軌道を少なくとも 1 つ持つことを証明せよ.

(4) G は位数 3 の部分群を少なくとも 1 つ持つことを証明せよ.

問題 4 解答例.

(1) $|\tilde{X}| = {}_{18}C_3 = \frac{18 \times 17 \times 16}{3 \times 2 \times 1} = 816.$ □

(2) $G_{\{g_1, g_2, g_3\}} = \{g \in G \mid \{gg_1, gg_2, gg_3\} = \{g_1, g_2, g_3\}\}$ であるので、各 $g \in G_{\{g_1, g_2, g_3\}}$ に対してある $i \in \{1, 2, 3\}$ が定まり、 $gg_i = g_i$ となる. このとき、 $g = g_i g_i^{-1}$. よって、

$$G_{\{g_1, g_2, g_3\}} \subset \{g_i g_i^{-1} \mid i = 1, 2, 3\}.$$

よって、 $|G_{\{g_1, g_2, g_3\}}| \leq 3.$ □

(3) 各 $\{g_1, g_2, g_3\} \in \tilde{X}$ に対し、 $|G| = |G \cdot \{g_1, g_2, g_3\}| \cdot |G_{\{g_1, g_2, g_3\}}|$ が成立する. 一方 (2) より、 $|G_{\{g_1, g_2, g_3\}}| \leq 3$ であり、さらに Lagrange の定理よりこの値は $|G| = 18$ の約数であることから、1, 2, 3 のいずれか. これらより軌道 $G \cdot \{g_1, g_2, g_3\}$ の元の個数は、18, 9, 6 のいずれか.

ここで元の個数が 6 の軌道が存在しないとすると、 \tilde{X} を軌道分解したときに元の個数が 18 または 9 の軌道で軌道分解されるので、特に \tilde{X} の元の個数は 9 の倍数となるが、(1) より \tilde{X} の元の個数は 816 で 9 の倍数ではない. 以上より、 \tilde{X} 上の G の作用は元の個数が 6 である軌道を少なくとも 1 つ持つ.

(4) (3) より元の個数が 6 である G の作用の軌道がとれるので、この軌道に含まれる元を $\{g_1, g_2, g_3\}$ とすると、 $|G| = |G \cdot \{g_1, g_2, g_3\}| \cdot |G_{\{g_1, g_2, g_3\}}|$ より、

$$|G_{\{g_1, g_2, g_3\}}| = \frac{|G|}{|G \cdot \{g_1, g_2, g_3\}|} = \frac{18}{6} = 3.$$

よって、 $G_{\{g_1, g_2, g_3\}}$ が位数 3 の G の部分群の例としてとれる. □

問題 5

G を位数 15 の有限群とする.

(1) $\tilde{X} := \{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\} \subset G \mid g_1, g_2, g_3, g_4, g_5 \text{ は相異なる } G \text{ の } 5 \text{ 元}\}$ とする. このとき, \tilde{X} の元の個数を求めよ (答えのみでよい).

(2)

$$G \times \tilde{X} \rightarrow \tilde{X}, (g, \{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}) \mapsto \{gg_1, gg_2, gg_3, gg_4, gg_5\}$$

は \tilde{X} 上の G の作用を定める. この作用に関する $\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\} \in \tilde{X}$ の元の固定部分群 $G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}$ の位数は 5 以下であることを証明せよ.

(3) (2) の \tilde{X} 上の G の作用は元の個数が 3 である軌道を少なくとも 1 つ持つことを証明せよ.

(4) G は位数 5 の部分群を少なくとも 1 つ持つことを証明せよ.

(5) G の位数 5 の部分群はただ一つであり, さらに正規部分群であることを証明せよ.

問題 5 解答例.

(1) $|\tilde{X}| = {}_{15}C_5 = \frac{15 \times 14 \times 13 \times 12 \times 11}{5 \times 4 \times 3 \times 2 \times 1} = 3003.$ □

(2) $G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}} = \{g \in G \mid \{gg_1, gg_2, gg_3, gg_4, gg_5\} = \{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}\}$ であるので, 各 $g \in G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}$ に対してある $i \in \{1, 2, 3, 4, 5\}$ が定まり, $gg_i = g_i$ となる. このとき, $g = g_i g_i^{-1}$. よって,

$$G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}} \subset \{g_i g_i^{-1} \mid i = 1, 2, 3, 4, 5\}.$$

よって, $|G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}| \leq 5.$ □

(3) 各 $\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\} \in \tilde{X}$ に対し, $|G| = |G \cdot \{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}| \cdot |G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}|$ が成立する. 一方 (2) より, $|G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}| \leq 5$ であり, さらに Lagrange の定理よりこの値は $|G| = 15$ の約数であることから, 1, 3, 5 のいずれか. これらより軌道 $G \cdot \{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}$ の元の個数は, 15, 5, 3 のいずれか.

ここで元の個数が 3 の軌道が存在しないとすると, \tilde{X} を軌道分解したときに元の個数が 15 または 5 の軌道で軌道分解されるので, 特に \tilde{X} の元の個数は 5 の倍数となるが, (1) より \tilde{X} の元の個数は 3003 で 5 の倍数ではない. 以上より, \tilde{X} 上の G の作用は元の個数が 3 である軌道を少なくとも 1 つ持つ.

(4) (3) より元の個数が 3 である G の作用の軌道がとれるので, この軌道に含まれる元を $\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}$ とすると, $|G| = |G \cdot \{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}| \cdot |G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}|$ より,

$$|G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}| = \frac{|G|}{|G \cdot \{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}|} = \frac{15}{3} = 5.$$

よって, $G_{\{g_1, g_2, g_3, g_4, g_5\}}$ が位数 5 の G の部分群の例としてとれる.

(5) $H, H' \subset G$ を位数 5 の部分群であるとする. このとき $H = H'$ となることを示せばよい. いま H, H' の位数は素数なので巡回群であり, $e \neq h \in H, e \neq h' \in H'$ とすると,

$$H = \{h^i \mid i = 0, 1, 2, 3, 4\} \qquad H' = \{(h')^j \mid j = 0, 1, 2, 3, 4\}$$

となる. ここで, $h^i (h')^j, i, j \in \{0, 1, 2, 3, 4\}$ は G の 25 個の元であるが, G の位数は 15 なので, ある $i_1, i_2, j_1, j_2 \in \{0, 1, 2, 3, 4\}, i_1 \neq i_2, j_1 \neq j_2$ が存在して, $h^{i_1} (h')^{j_1} = h^{i_2} (h')^{j_2}$ となる. このとき, $h^{i_1 - i_2} = (h')^{j_2 - j_1} \in H \cap H'$ である. いま $H \cap H'$ は H の部分群であるが, 一方 H の位数は素数なので H の部分群は $\{e\}$ か H のいずれか. $H \cap H' = \{e\}$ と仮定すると, $h^{i_1 - i_2} = (h')^{j_2 - j_1} = e$ となるが, $i_1, i_2, j_1, j_2 \in \{0, 1, 2, 3, 4\}$ より, $i_1 \neq i_2, j_1 \neq j_2$ のときこれを満たす i_1, i_2, j_1, j_2 は存在しない. よって, $H \cap H' = H$ であり, 特に $H \subset H'$. さらに H と H' の位数はともに 5 であるので, $H = H'$. よって, G の位数 5 の部分群はただ一つである.

さらに H を G の位数 5 の部分群とすると、任意の $g \in G$ に対して、 gHg^{-1} も位数 5 の部分群となるが、位数 5 の部分群はただ一つであることより、 $gHg^{-1} = H$. よって、 H は G の正規部分群である. \square

付録：群作用と共役類

定義. 群 G と集合 X に対し、写像

$$f: G \times X \rightarrow X, (g, x) \mapsto f(g, x)$$

が次の 2 条件を満たすとき、これを X 上の G の作用 (action) という. (記号を簡潔にするため以下では $f(g, x)$ を単に $g.x$ と書く.)

- (i) 任意の $g, h \in G, x \in X$ に対し、 $(gh).x = g.(h.x)$.
- (ii) 任意の $x \in X$ に対し、 $e.x = x$. ただし、 e は G の単位元.

G の作用に関する $x \in X$ の軌道 (orbit) を

$$G.x := \{g.x \mid g \in G\}$$

と定める. また、 $x \in X$ における G の固定部分群 (stabilizer) を

$$G_x := \{g \in G \mid g.x = x\}$$

と定める. G_x は G の部分群となる. また、記号は似ているが $G.x$ は X の部分集合であり、 G_x は G の部分群であることを注意しておく.

例 1. $X := \{1, 2, 3, 4, 5\}$ としたとき、

$$\mathfrak{S}_5 \times X \rightarrow X, (\sigma, i) \mapsto \sigma.i := \sigma(i)$$

は X 上の \mathfrak{S}_5 の作用を定める. 例えば、

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 3 & 1 & 4 & 2 & 5 \end{pmatrix}.1 = 3, \quad \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 3 & 1 & 4 & 2 & 5 \end{pmatrix}.2 = 1, \quad \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 3 & 1 & 4 & 2 & 5 \end{pmatrix}.5 = 5$$

などとなる. さらに、

$$\mathfrak{S}_5.1 = \{1, 2, 3, 4, 5\} = X, \quad (\mathfrak{S}_5)_1 = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 1 & i_1 & i_2 & i_3 & i_4 \end{pmatrix} \in \mathfrak{S}_5 \mid \{i_1, i_2, i_3, i_4\} = \{2, 3, 4, 5\} \right\}$$

となる. ちなみにこれが群作用であることは以下の計算から確かめられる.

- (i) の確認 任意の $\sigma, \tau \in \mathfrak{S}_5, i \in X$ に対し、 $(\sigma\tau).i = \sigma\tau(i) = \sigma(\tau(i)) = \sigma.(\tau.i)$.
- (ii) の確認 任意の $i \in X$ に対し、 $\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \end{pmatrix}.i = i$.

例 2. $X := \mathbb{R}^2$ としたとき、

$$GL_2(\mathbb{R}) \times \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2, \left(\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) \mapsto \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax + by \\ cx + dy \end{pmatrix} \quad (\text{行列の積})$$

は \mathbb{R}^2 上の $GL_2(\mathbb{R})$ の作用を定める. これが群作用であることは以下の計算から確かめられる.

- (i) の確認 任意の $g_1, g_2 \in GL_2(\mathbb{R}), v \in \mathbb{R}^2$ に対し、 $(g_1g_2) \cdot v = g_1 \cdot (g_2 \cdot v)$ (行列の積の結合法則).
- (ii) の確認 任意の $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$ に対し、 $\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$.

例えば、

$$GL_2(\mathbb{R}) \cdot \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} = \left\{ \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} \right\},$$

$$GL_2(\mathbb{R}) \cdot \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \left\{ \begin{pmatrix} a \\ c \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2 \mid \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \in GL_2(\mathbb{R}) \right\} = \mathbb{R}^2 \setminus \left\{ \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} \right\},$$

$$GL_2(\mathbb{R})_{\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}} = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & b \\ 0 & d \end{pmatrix} \in GL_2(\mathbb{R}) \mid d \neq 0 \right\}$$

となる。

定義. G を群、 X を集合とし、

$$G \times X \rightarrow X, (g, x) \mapsto g.x$$

を X 上の G の作用とする。このとき、 X は G の作用に関する軌道の和に分割される。つまり、

$$X = \coprod_{\lambda \in \Lambda} O_\lambda$$

ただし、各 O_λ は軌道、 Λ は各軌道を添え字付ける適当な添え字集合、という形に書ける。 $\lambda \neq \lambda'$ であれば $O_\lambda \cap O_{\lambda'} = \emptyset$ である。これを軌道分解という。

G の作用を用いて X 上の同値関係 \sim を

$$x \sim y \Leftrightarrow \text{ある } g \in G \text{ が存在して、} x = g.y$$

で定めることができることを思い出すと、各軌道 O_λ は同値関係 \sim に関する同値類とちょうど対応し、軌道分解できることは同値関係の一般論から従う。

例 3. 例 1 では、軌道分解は

$$X = \mathfrak{S}_{5,1}$$

であった。つまり、このとき X は 1 つの軌道に分解されていた。例 2 では、軌道分解は

$$\mathbb{R}^2 = \left\{ \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} \right\} \amalg \left(\mathbb{R}^2 \setminus \left\{ \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} \right\} \right) = GL_2(\mathbb{R}) \cdot \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix} \amalg GL_2(\mathbb{R}) \cdot \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

であった。特に、このとき \mathbb{R}^2 は 2 つの軌道に分解されていた。

群の軌道の構造については次の定理が基本的である。

定理

G を群、 X を集合とし、

$$G \times X \rightarrow X, (g, x) \mapsto g.x$$

を X 上の G の作用とする。このとき、任意の $x \in X$ に対し、

$$G/G_x \rightarrow G.x, gG_x \mapsto g.x$$

は集合としての全単射である。特に G が有限群のとき、

$$\frac{|G|}{|G_x|} = |G/G_x| = |G.x|$$

である。(これは G の G_x における指数に他ならない。)

例 4. 確かに例 1 では、

$$\frac{|\mathfrak{S}_5|}{|(\mathfrak{S}_5)_1|} = \frac{5!}{4!} = 5, \quad |\mathfrak{S}_5 \cdot 1| = |X| = 5$$

であった。

定義. G を群としたとき、

$$G \times G \rightarrow G, (g, h) \mapsto g.h := ghg^{-1}$$

は G 上の G の作用を定める. これが群作用であることは以下の計算から確かめられる.

(i) の確認 任意の $g_1, g_2, h \in G$ に対し、

$$(g_1 g_2).h = g_1 g_2 h (g_1 g_2)^{-1} = g_1 (g_2 h g_2^{-1}) g_1^{-1} = g_1.(g_2.h).$$

(ii) の確認 任意の $h \in G$ に対し、 $e.h = e h e^{-1} = h$.

この群作用に関する軌道は特に共役類と呼ばれる. 各 $g \in G$ に対し、 g を含む共役類 $K(g)$ は具体的には、

$$K(g) = \{hgh^{-1} \mid h \in G\}$$

である. なおある $h \in G$ が存在して、 $g_1 = hg_2h^{-1}$ となるとき (つまり、 $g_1 \in K(g_2)$ のとき)、 g_1 と g_2 は共役であるという.

群作用の軌道分解の一般論から、群 G は共役類の和集合の形に分割されることがわかる.

例 5. 3 次対称群 \mathfrak{S}_3 の共役類は、 $\{e\}$ 、 $\{(1\ 2), (2\ 3), (1\ 3)\}$ 、 $\{(1\ 2\ 3), (1\ 3\ 2)\}$ で全てである. つまり、

$$\mathfrak{S}_3 = \{e\} \coprod \{(1\ 2), (2\ 3), (1\ 3)\} \coprod \{(1\ 2\ 3), (1\ 3\ 2)\}$$

は \mathfrak{S}_3 の共役類への分割である. 定義通り確認してみよ. (例えば、任意の $\sigma \in \mathfrak{S}_3$ に対して、 $\sigma e \sigma^{-1} = e$ 、 $(1\ 2\ 3)(1\ 2)(1\ 2\ 3)^{-1} = (2\ 3)$, etc.)